

少弐氏と渋川氏の筑前退去

応永3（1396）年、渋川満頼が九州探題（室町幕府の九州統治機関）に任命され、同年4月以降に九州博多に南向すると、翌年、筑前大宰府を拠点とする少弐貞頼と肥後菊池を拠点とする菊池武朝は、満頼に対して反旗を翻しました。同年12月、武朝は鎮圧軍の大友氏と和睦を結んだようですが、貞頼は同6年頃まで反乱を継続したとみられます。

そもそも、鎌倉時代後期、北条氏による鎮西探題（鎌倉幕府の九州統治機関）が博多に置かれた際、少弐氏は同じ筑前を本拠とすること、また、それまでの九州の御家人のトップとしての地位が脅かされることから、探題とは内在的な競合関係をもち、それが探題を滅亡させる原動力となりました。南北朝時代以降に置かれた九州探題についても同様の競合関係があったことが、両氏の対立の要因であったといえるでしょう。

応永11年には、肥前千葉氏の内訌事件を契機として、貞頼は再び満頼と対立しています。同年6月、貞頼は死去しますが、貞頼没後も戦争状態は治まらず、翌年12月の豊前猪獄合戦に満頼が勝利したことで、ようやく決着をみます。

その後しばらくは、反乱も起きず

平穏な日々だったので、貞頼の跡を継いだ少弐満貞が、応永32年、菊池兼朝とともに反乱を起こします。この前年、九州探題の満頼は隠居して京都に戻っており、反乱が起きたときには息子の義俊が九州探題職を継いでいました。義俊は貞頼らの攻撃に耐えきれず、肥前へ没落します。

この反乱を鎮圧するため、同年7月、幕府は周防の大内盛見を九州に南向させました。同年10月、盛見は満貞を破ります。これにより、満貞は肥後菊池氏のもとに身を寄せ、満貞の子の小法師丸は対馬へと逃れました。



こうして、探題渋川氏と鎌倉時代からの九州の名族少弐氏は、ともに本拠とする筑前から退去することとなりました。その後、渋川氏は肥前綾部城を拠点として九州探題職を世襲するものの、かつての勢力を回復することとはなく、少弐氏は対馬や肥前に逃れながら大宰府の奪還を目指してたびたび反乱を起こすものの、大宰府に定着することはできませんでした。そして、筑前は大内氏が支配する時代へと移行するのです。

元太宰府市公文書館 朱雀 信城